

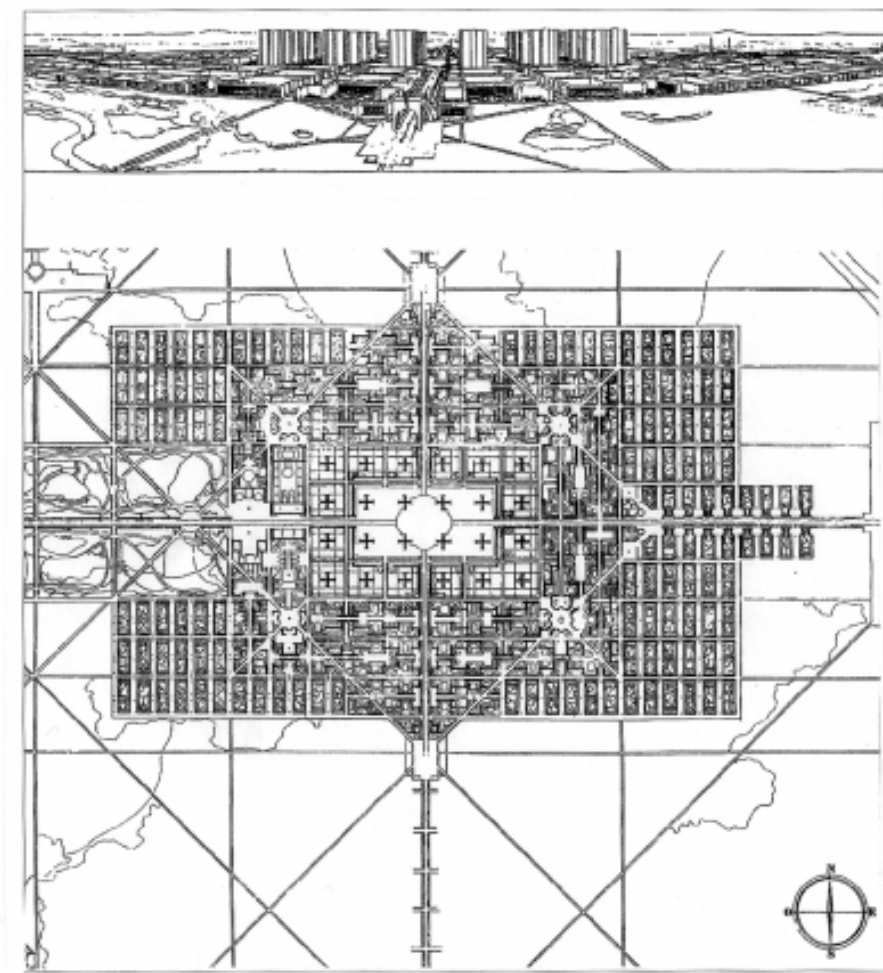
JIA news kinki

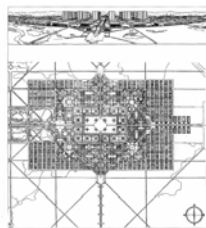
# 翔

syo

no.097/2006

新春号





表紙写真：  
「三百万人の現代都市」  
ル・コルビュジエ

### 表紙解説 - ル・コルビュジエによる「三百万人の現代都市」

薬師寺主計が釘付けとなったル・コルビュジエによるパリの新都市計画図。パリは城塞都市で、歴史的には人口の増加につれて城壁が拡大していった。薬師寺が訪れた1922年当時は、人口が291万人前後で、ちょうどピークの時期を迎えていた。このパリの状況の中で提案されたル・コルビュジエの新都市計画に、薬師寺は建築の伝統や様式をうち破る造形として感銘を受けた。

## CONTENTS

### 連載

「西国巡礼古道を歩く」	木戸口浩之	3
「デザイントーク」	本多友常	5
「住宅部会通信2005」	西濱浩次	9
	増田靖仁	9
「建築家の視点」	吉村篤一	10
「都市点描」	大坪 明	12

### 情報

新入会員紹介	14
「編集後記」	小池啓夫 14

### 地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

#### その7 ル・コルビュジエとの出会い

人との出会いによって人の運命・生き方・考え方も変わるものである。薬師寺主計(1884-1965)は1922年11月に日本人の建築家として初めてル・コルビュジエ(1887-1965)に出会い、彼の建築論を直接聞き取り、帰国している。きっかけは、パリのグラン・パレで開催されていたサロン・ドートンヌで、ル・コルビュジエが出版していた「三百万人の現代都市」という大鳥瞰図に出くわしたことであった。当時、薬師寺は、大原家から倉敷の新しいまちづくりも託されていた。ル・コルビュジエの構想には度肝を抜かれたことと思われる。その時の感動を薬師寺は次のように語っている。「それは地下にて集まった鉄道の停車場を中心とし、廻りに十字形の肋骨式平面を有する高層建築を置いてヴイジネスクォーターとし、その周囲の商業地区は碁盤目と筋違の街路にて区画し、これに広い空地を持った整然たる建築を配し、十文字に貫通する中央大路には四大門を設けて入口となし、郊外は樹木と花園で埋もれた公園と住宅を配した、いわゆる新理想の都市計画とも見るべきものである。なおこれに附属したる各建築物の設計図等も並べられ住宅模型等も陳列してあつた。この計画図の兎角の批評は別として、計画者の努力には全く敬服驚嘆させられた」。

当時、ル・コルビュジエは35歳で、若き建築家として頭角を現し始めた頃であった。薬師寺主計は面談し、建築デザインに関するル・コルビュジエの考え方も聞き取っている。ル・コルビュジエは薬師寺に、「世界の文化は現代において実用経済ということが重要な要素となってきたのだ。それにもかかわらず建築のみが独り浮世離れて、やれ印象だの表現だのなどと、これ等のみ捕捉されあくせくするのは実在の社会と没交渉なことで各自勝手な遊戯気分につけるの類で楽屋落ちに過ぎないものだ。自分はこの意味に於いて人生に痛切にして時代に適應せる超民族的な建築の実現を理想とする」と。後に広まるインター・ナショナル・スタイルの考え方を聞き取っていた。

偶然とは言え、ル・コルビュジエと出会い、彼の偉大さを見抜き、帰国直後に彼の考え方を建築雑誌『建築世界』で披露した薬師寺主計の先見性、新しい芸術・建築を見抜く洞察力は高く評価されよう。

参考文献：上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003  
(ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授上田恭嗣)

## 京都の古道を楽しむ

木戸口浩之  
(まちづくりや)



西国巡礼なるものがあることを、私はこのシリーズが始まるまで知りませんでした。巡礼といえば四国八十八カ所、お遍路さんであろうと。しかし、畿内で三十三カ所の観音様を巡礼する歴史が、四国よりもさらに古くからあったのは当然のことかもしれません。

巡礼する順序は最初から決まっていたものではなく、江戸時代に今の何番札所というものができたようです。ということは、巡礼の際に通る道は幾通りがあったでしょうし、ましてや京都市内5カ所の霊場をまわるのに、きっと人それぞれに道を選んでいたのではないのでしょうか。京都はさいわい古道だらけですので、私が選んだ道をご紹介しますながら京都市内巡礼と参ります。慈悲に甲乙、へだてのない観音さんのこと、お許しをいただけますでしょう。

その前に、平安京の位置を確認しておきます。北は一条から南は九条までで、現在もほぼ同じ位置にあります。平安京の東は東京極大路で、現在の寺町通りのあたり、西は西京極大路で現存しません。葛野大路の少し西、西京極競技場の東側あたりに位置していたようです。いつも歩いている四条通りは、千二百年も前から人の往来が絶えることなく今日に続いていると思うと、不思議な気がします。

振り出しは第十五番札所今熊野観音です。京阪・JRの東福寺駅から東大路通りを北に行き、泉涌寺道を東に入り、ゆるい坂道を上っていきます。山門をくぐると、緑に包まれた参道が続き、凜とした空気が流れているような気がします。この参道の歴史はわかりませんでしたが、多くの巡礼者が思い思いにこの道を歩いていたのでしょう。

いったん、東福寺駅に戻ります。駅前の道は伏見街道、別名大和街道とも呼ばれており、南は伏見から奈良へと続いていきます。道沿いには東福寺、伏見稻荷大社、藤森神社などがありますが、巡礼のルートとは逆方向になってしまいます。この道は豊臣秀吉が京と伏見城を直結する道として、安土桃山時代に開かれた道です。今は寂れた景観となっていますが、あちらこちらに町家も見られ、伏見稻荷界限には、町家で店を続けているところも多く残っています。

七条通りに出て、一筋東の南北の通りが大和大路通り。大和大路通りの七条通りに面して南側に三十三間堂、北側に京都国立博物館があります。その北隣に秀吉を祭る豊国神社、そのまた北に豊臣家滅亡のきっかけとなった「国家安康君臣豊楽」の文字を銅鐘に刻んだ方広寺があります。これを北上すると、第十七番札所六波羅蜜寺の案内標識が見えてきます。さらに北上すると、恵比寿神社や建仁寺があり、四条通り手前では狭い道に料理屋、履き物屋、マンション、百円パーキング、スナックの入っている雑居ビルがひしめき合っています。四条通り以北は江戸時代には縄手通りと呼ばれ、今もその名称で親しまれていることはご存じの方も多いことでしょう。



画像1 泉涌寺の山門  
山門を抜けてしばらく歩くと右側に泉涌寺。その向かい側に今熊野観音がある。鳥居橋を渡るとすぐに境内。



画像2 伏見街道  
ところどころに町家が残っている。



出展：『西国三十三カ所を歩く』  
(山と溪谷社)

## 西国巡礼古道を歩く

第十六番札所、清水寺が抜けておりました。大和大路通りを松原で東に入り直進すると、東大路通りから先が清水坂になります。清水寺の創建は平安期以前で、清水坂もこれにともなって開かれたと言われていますから、四条通りなど平安京の大路小路よりも歴史は古いことになります。観光名所として栄える三年坂、二年坂は諸説があるようですが、坂上田村麻呂が開いたとも言われているので、平安の初期からあったと思われます。久しぶりに東山界隈を観光、という方はここから、八坂さんを目指して、四条通りで西に向かって下さい。

次は、第十八番札所、六角堂です。四条大橋から六角堂へはいかようにでも行けますが、新京極通りで北へ、錦小路通りで西へ、東洞院通りで北へ、六角通りで西にいきましょう。新京極通りは、もともと誓願寺や金蓮寺の門前町だったのを明治5年に京都府が文明開化の風が吹く中、開いた道です。

錦天満宮から錦小路へ。錦天満宮は平安期からありましたが、豊臣秀吉の計画によって現在地に移転しています。どうも、道路の歴史を紐解いていくと、秀吉公がたびたびお出ましになる。都市計画家、秀吉の面目躍如といったところでしょうか。錦小路は平安京の初期からありましたが、小路に名称が付けられたのは鎌倉の頃とも言われており、錦小路は具足小路、くそ小路などと呼ばれていた時代もあり、多くの逸話が残されています。現在は京都の台所と言われていますが、これは江戸時代から続いているこの通りの歴史です。余談ですが、錦小路は両側にグレーチングがずっと引いてあるのですが、京都市の道路境界はその外側にあります。公道にグレーチング・・・今度、京都市の方に聞いてみようと思っています。

東洞院通りを北へ。この通りは平安時代には東洞院大路と言われ、天皇さんが引退されたされたあと、この通りに住まれることが多く、高倉宮御所跡などが現在も残っています。江戸中期に竹田街道につながる幹線道路として混雑し、北行き一方通行規制がしかれています。今は、南行き一方通行ですが。再び余談ですが、六角通りの手前にウィングス京都という公共施設があり、京都会の役員会ではいつも利用しています。

六角堂は、正式には紫雲山頂法寺。六角通りに面しているのが六角堂と称されています。今は池坊の本拠地として有名で、聖徳太子が建立したらしいとは知らない方も多いことでしょう。平安京造営に際して、東西の小路がお堂にあたるので嘆いていたところ、ゴトリと北に動いたそうです。

最後、第十九番札所、革堂です。三条通りから、寺町を北に上がって行きましょう。三条通りはご存じの方も多いでしょうが、明治の初期に栄えたところで、文化博物館（旧日銀京都支店）をはじめレンガ造の建物が多く残っています。また、町家もあり、現代建築もあり、まさにモザイクの様相を呈しています。最近レトロな建物をリニューアルして、成功しているところもたくさんあるのは良く知られているところです。寺町通りは平安京の東端。応仁の乱で荒廃しこれまた秀吉が再興した道。20年ほど前は寂れていましたが、平成にはいった頃から元気を取り戻してきています。老舗や古書店、ギャラリーが立ち並ぶ道が元気を取り戻したのは嬉しいことです。東海道の終点が三条大橋。かつて賑わい、一時すたれたこの二つの道に賑わいが戻った。どんな道も、そういう可能性がある気がしています。

つたないガイドで、多分ちゃんとした京都の地図を片手でないとまわれないと思いますが、京都の古道、楽しんでみて下さい。



画像3 大和大路通り  
方広寺の石垣。  
秀吉が全国の大名に命じて集めさせた巨石で、重さ数十トンといわれている。



画像4 三条通り  
レンガ造の建物が多い三条通り。  
右手前が文化博物館（旧日銀京都支店）



画像5 寺町通り  
三条通りから御池にかけてはギャラリーがたくさんある。右手前は三条姉小路の鳩居堂

# デザイントーク 2004年度 第7回 (2005 / 3 / 23開催)

【評者】・出江寛(出江建築事務所)・木村博昭(神戸芸術工科大学)・小島 孜(近畿大学)  
・高砂正弘(梅花女子大学)・本多友常(和歌山大学)・吉村篤一(建築環境研究所)

吉井歳晴氏 / WIZ ARCHITECTS

- ・ 武庫之荘の家
- ・ 住宅メーカーの都市型モデル商品開発

最小限住宅をはじめ、住宅の設計に取り組んできた豊富な経験を背景に、住まいの設計者として、ふたつの方法論が、対比的に紹介された。ひとつは住人の顔をまのあたりにする注文住宅であり、一方は顔の見えない住宅の商品化にむけた提案である。これはともに供給から消費にわたる現代の都市居住に関わる課題として、幅広い問いかけとなっており、建築家の豊富な活動の節目として示された。

「武庫之荘の家」は建売り住宅の建ち並ぶ街区に挿入された1階壁式鉄筋コンクリート、2、3階木造軸組構造の住宅である。

建築主は歩行に障害を持つ身体障害者であり、バリアフリーのあり方を深く問われたものである。リハビリや言語のトレーニング、入浴、排便、就寝などの日常生活行為を積極的に浮き彫りにし、身体障害を生活行為における負の要件としてとらえることなく、生活者のきめ細かい動きを積極的に設計の決定要素としてとらえることが、この住宅における設計態度として貫かれている。

バルコニーの幅いっぱいにはげられた居間と食堂は、運動と休息の生活行為の緩急を受け止めるべく配置されており、デスクワークのためのカウンターデスク、休息のための和室、使いやすいトイレ、などがエレベータを中心に回遊動線に沿ってまとめられている。

住人の生活は「普通の生活」という言葉で一般化されがちだが、実は何一つとして同じ生活はあり得ない。この個別性に対する設計者のスタンスの取り方は、特に身体障害というキーワードを背景に、空間の組み立てから細部にいたるまで一貫し、デザイントークにおいては、手すりの高さ、ディテール、素材の選び方において、住人の行為から寸法を導き出していく姿勢が



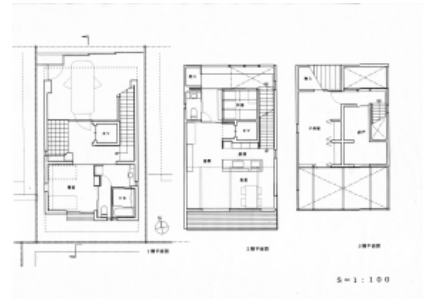
## デザイントーク

高く評価された。

一方「住宅メーカーの都市型モデル商品開発」においては、一般消費者への流通を前提としたプロジェクトとして、住人の顔や生活パターンは、はじめから抽象化されたものとして扱われている。プロジェクト提案のきっかけは、大阪での長屋の建て替えをはじめ多くの設計実績が認められた結果として、標準化への試みをメーカーから依頼されたものだという。このためいやが応でも、長年にわたる地道な設計活動の集大成としての位置づけが求められており、狭小住宅への解の導き方が課題となっている。その核心は、平面の関係を徹底的に分析して、再構成することに意識が集中されており、緩やかな機能と緩やかな動線をいかに巧妙に重ね合わせていくことができるかという点に絞られている。

ここでは間仕切り、建具の配置を注意深く配置することにより、連続的につながる住空間の隅々に、フレキシブルで柔らかな場所性を生み出そうとする試みとして、部屋の役割を曖昧にしていく方向に向かっている。それは空間の意味を無化するきわどい境界域に向かう追求ではあるが、建築家吉井歳晴が得意としてきた範疇でもある。このためか会場からは、制約の多い初期の狭小住宅についてはコンセプトが明確化されている反面、「武庫之荘の家」のようにきめ細かい住人の要求を入れていくと、その強さが薄れていくのではないかと声があげられた。

それにたいし、建築は建築家の作業として閉じることなく、広く住人をはじめとした第三者の意見に対してもゆだねるべきであり、「プランニングと外観もしくは材料の選び方は、分離化できる。」「テイストは（建築主の意向に）任せる、それでもプランニングの強度は保つことができ、タフなものである。（建築の）編集は可能であると考える。」としたスタンスが語られ、静かにしかし過激に設計の決定システムを、開放系に向かわせる旅立ちへの宣言となった。



## デザイントーク

石井良平氏 / 石井良平建築研究所  
・大阪府豊中市の豊中文化幼稚園増築棟

創設以来60年近くになる幼稚園の一部改築であり、子供たちのための「大きな家」と「小さな森」として紹介された。

昔から育てられてきた園庭の大きな銀杏を取り巻くように、回廊でつながれた新しい園舎は、不整形な敷地の特徴を生かした平面計画の自由な角度が幼稚園らしい空間を生み出している。

子供を取り巻く環境が厳しくなりつつある風潮の中で、ここでは子供のためにのびのびと安心して遊べる環境を生み出すことが、発想の原点として据えられている。そのためパステルカラー調に花柄模様のような、無批判に採用されがちな定型化された空間や人工的な遊具の要素は避けられている。むしろ五感を使うことによって自分たちの空間を見出していけるような場を与えるきっかけとして、キャストのついた家具、ロッカー、遊具などがたくみに組み合わせられ、配置されている。

2階の保育室には高く大きな天井が3つの部屋にまたがって覆いかぶさり、それぞれの保育室をつなぐように配された「家具の森」と名付けられた遊具、兼、収納棚、兼、間仕切りの上には、子供たちが自由に登って歩けるようになっているなど、楽しいアイデアは外部にまで広がっている。

また増築された園舎と既存園舎をつなぐ「森の遊具」と名付けられた木の道には、子供達の姿が生き生きと映し出されており、子供がいてはじめて生きる空間であることを如実に物語っていた。このように小さな「森の遊具」や、室内の「家具の森」を中心とした空間は、いろいろなスケールに富み、豊かな襞を生み出しており、建築家石井良平の大らかな人となりと園児に向けられた眼差しが、子供の世界を大きく見守っている姿として、デザイントークにおいては好感をもって迎えられた。

ここでは明らかに建築物としての建物は主体ではなく、広い意味での園庭を主題とした環境として示されており、高度な環境計画への試みとなっている。

しかしその反面、建築に刻みこまれた形や平面形態の



## デザイントーク

決定にあたり、建築としての統合の論理をどこに求めているのか、骨格はどこにあるのかは、必ず問われる質問としての論点でもある。

そこでは自由な形の拠り所、敷地形状になじませた平面の論理性、全体の大きさの是非、環境形成と建築の従属性などについて話題が広げられた。

建築が人々の活動の背景となって、環境として溶け込むことは、究極のあり方であると同時に「人間の心を潤すものは自然の樹木だけではなく、建築における素材と形においても深く追求すべきである。」との評が出江氏からあげられた。

この議論は単に幼稚園の設計に向けられたものではなく、建築に何を求めるべきかの現代的な課題として、常に議論されるべき課題であることに変わりはない。

その設計の方法論とテイストにおいて、吉井歳晴と石井良平はほぼ対局に位置している。

設計行為というフィールドに込められたこだわりと大らかさ。その観点の違いが大きく着目され、このトークにおいても対比的な組み合わせとして企画された。しかしここで見ておきたいことは、双方ともに最終の決定行為を他者に委ねようとする姿勢が共通して意識されているという点であろう。現代において、全能な建築家像としての虚構性はとっくにあばかれ尽くされてしまっている。今建築家に求められるのは、何にこだわりをもち、何を解放系として解き放つかの価値の整理にその専門性が問われ始めている。

吉井歳晴の抽象的な鋭さに、建築主の要求を入れていくと、建築は精彩を失いかねない。石井良平の大らかさに形の論理性を求めすぎると、その包容力を失いかねない。デザイントークは、立ち止まり振り返ることによって、参加者全員の設計活動に自らの距離感を回復することが目的となっている。そこにあげられる批評は、すべて負の要素としてではなく、むしろ時代の要請に応えていく動力として、建築の変革に向けられていると見るべきであり、両者の建築はその課題を鮮明に浮き彫りにしてくれることになった。

(まとめ 本多友常)





## 住宅部会通信 2005

## 9月例会のご報告

担当世話人：橋本友三 / 西濱浩次

西濱浩次

(コンパス建築工房)



今回のスライド講習会「中国&ネパール紀行」は担当世話人でもある橋本友三氏自ら講師をお引き受けいただいた。25名の参加をいただき、ビールを飲みながら和やかな雰囲気の中で、中国の目覚ましい発展の近況、ネパール僻地でのボランティアを通じた人々とのふれあいや風習などを報告いただいた。氏は今ではネパールの魅力に取り付かれて年に数度も訪れるようになってしまっているとのこと。また、最近では上海から建材を直輸入することによりビックリするようなコストで自作を完成させた経験なども報告いただいた。単に建築設計だけでなく、その流通にまで踏み込んで、建築家の枠にとらわれず幅広く建築活動を広げられている。今回の講演ではどこか懐かしさがあると共に、成熟しきった日本の建築にとって、急変しつつある中国などとの付き合い方やコラボレートな仕事の進め方など、改めてまだまだその可能性が探れそうな気がしました。



## 10月例会のご報告

担当世話人：増田靖仁 / 木原千利

増田靖仁

(エム・デー建築事務所)



安井清氏は「桂離宮」昭和大修理をはじめ、「待庵」「如庵」など伝統建築の修復を多く手がけられ、またニューヨーク市メトロポリタン美術館内の日本ギャラリー、熊本市との姉妹都市記念事業としてのテキサス州サンアントニオ植物園内にある日本庭園「熊本園」の施工にも従事されました。そのかたわら熊本県球磨高等学校、島根県立松江高等技術校や大学で、日本の伝統建築について講義を行うなど、後進の育成にも力を注いでおられます。当日はご高齢にもかかわらず、熱心に桂離宮のスライドなどを紹介しながら建築家の素養として身に付けておきたい伝統建築に関する知識の数々を話して頂きました。豊富な経験に基づいた多くの知識は他では得られないものが多く貴重な例会でした。講師のご理解も有るようなので、今後も是非当会の若い建築家にお話頂く機会が出来ればと思います。また、当会員の業務の中で伝統建築に関する疑問点が有れば何時でも教えて頂けるとの事なので遠慮なくお問い合わせ下さい。



安井清氏：やすいきよし事務所  
(伝統建築保存家)

## 「普通の町家建築等の 保存について」

吉村 篤一

保存再生委員会（建築環境研究所）



ここ10数年の間に京都の多くの近代建築が烏丸通りの銀行建築等を中心に失われてしまった。そして昨秋も、ひょっとしたら残るかもしれないと一縷の望みを抱いていた四条烏丸の一角にあった旧東京三菱銀行も、更地になって埋蔵文化財の調査をしているところに出くわして、なんとも寂しい気持ちになってしまった。これで烏丸通にあった明治、大正の銀行建築は旧北國銀行を除けば全滅といってよい。そしてうわさによるとこれも早晩壊されるらしいとのことである。これらのなかにはレプリカ保存やほんの一部の部分保存もあるが、それが存在していたときと比べると、その建築的価値はほとんどなくなっているといっても過言ではない。そして、そのあとにできた建築のほとんどは以前のものに比べ建築的なレベルは低いものがほとんどである。そんななかで、「新風館」と昨年オープンした「COCON烏丸」はデザインの好き嫌いは別にして、古い建築を活かして現代性を表現しているものとして成功しているが、もとの建築が取り壊されたものに比べそれほど重要度が高くない建築であるので、インパクトが小さい感じがする。

これにくらべて、三条通では「中京郵便局（旧京都中央郵便局）」や「京都文化博物館別館（旧日銀京都支店）」、「旧毎日新聞京都支局（1928ビル）」などがほとんど以前の形がそのまま残され、かつ現代の使用に耐えられるように改造され、もとの建築の価値が十分生かされている。これ以外にも「日本生命ビル」や「SAKURAビル」等のこれらに準ずるものもあり、また木造の町家建築なども残っている。そして新しい現代建築もそれほど質の低いものが少ないこともあり、明治、大正、昭和、平成の、それぞれの特徴ある建築が立ち並ぶことにより魅力ある都心の界隈として甦り、昨今は若者たちを中心に散策客で賑わっている。かつての京都のメインストリートの地位を取り戻しつつあるようだ。このように、過去の時代の特徴ある建築に質の高い現代建築も加わっていくことにより、新しい町並みができていくのがこれからの歴史都市の都心地区の生き伸びてゆく道なのだろう。

一方、京都の町家や大阪の長屋等が近来にないブームを迎え、「町家でごはん」などといった飲食店の情報誌に町家を改造したレストランなどが“軒を連ねて”いる。これは町家がなくなってしまうよりはよいことではあるが、町家本来の姿ではないところがやや残念な気もしないではない。どんな形であれ町家が残ることは、壊されたあとに国籍不明の建売や何とか風のメーカー住宅が建ってしまうよりは良いことではある。そして、このように町家が注目されることにより、これからはバブルのころのようにどんどん壊されるようなことはないだ



写真1 京都岡崎天王町付近の立派な木造住宅



写真2 写真1の住宅が取り壊されて更地になったところ。町の風情がなくなっている。



写真3 京都岡崎天王町付近の町並

## 建築家の視点

ろうと思われるので、これも良しとしなければなるまい。

しかしながら、町家建築 - 特に昭和初期頃に建てられた木造住宅は、戸建、借家、長屋を問わずレベルの高いものが多いが - にも比較的建築的価値が高く保存状態の良いもの a とそうでないもの b、それほど建築的価値はなくても、メンテナンスが良いもの c もあるし、またそうでないもの d とがある。aはそれほど努力しなくても残る可能性は大であり、bも所有者が心ある人であれば、その特長を生かしてリノベーションすることにより現代生活が可能な空間に転換することもできる。しかし、c、dなどはよほど所有者がその気にならなければいづれは壊れてしまう運命にあるものが多い。けれども、こういった町家の数が最も多く、都市の中で風情ある町並みを形成している場合が多いので、これらがなくなってしまうとその地域の特徴が失われてしまうことになる。これからはバブルのころのように一度なくなってしまうことはなく、1～2戸程度ことかもしれないがそれだけにあまり気にならないこともあり、気がつけば町並みが変わってしまっているということになりかねない。そのようなことにならないよう、b、c、dにあたる町家に類する木造住宅等（写真1～6）を保存する手立てを考えないと都市はますます殺風景になる、というよりはその地域の独特の風情が失われてしまう。

そこでこれらが失われないよう、あるいは、壊されてもあとにできるものが以前と同程度のものになるような手だてはないのだろうか、といつもこれらの前を通るたびごとに思ってしまう。木造であるからいずれは朽ち果てるだろうから、建替えるのは致し方ないとしても、そのあとにできるものは、殆ど以前のほうが良かったと思われるものであるところが現代建築の哀しいところなのだろう。京都市内に残っているaに属すると思われる町家には「歴史的意匠建造物」というプレートが取り付けられているが、b、cは単体としての建築的価値はそれほどではないけれども、これらが数軒並ぶことにより風情ある町並みを作っているのが、現状のまま少し手を入れて住み続けてもらうよう所有者に助言する、といった施策の可能性はないものなのか。あるいはその建築的価値を認めて、手を入れるための費用を補助するといった制度を導入することも必要かもしれない。そうでもしなければ、せっかく残っている庶民の住まいである木造建築の遺産を、みすみす失ってしまうことになる。このような庶民の住まいを歴史の一部として残していくことにより、後世の人たちは博物館の中に昔の街並みを再現する必要はなくなるだろう。超豪華な迎賓館を建てる費用の1%でもこういったことにまわすことができれば、京都をはじめ歴史都市の町並みの崩壊に相当歯止めをかけることができるはずだ。また、このようなことに携わることもこれからの建築家の職能のひとつとして認められるような社会になることを望みたいものである。



写真4 京都松ヶ崎の借家



写真5 大阪阪南町の2階建て長屋



写真6 大阪阪南町の町家

これら、写真3～6がなくなるとこれらの地域独特の風情がなくなってしまう。

## ルール工業地帯の地域再生 (IBAエムシャーパークの取り組み)

大坪 明  
(都市デザイン委員会委員)



ルール地方はドイツ西部のルール川流域とその隣接地域で、1840年代に石炭の採掘が先ず伝統的都市がありルール川の水運を利用できた南部に始まり、大規模な鉱工業へと発展した。未開発であった同地方北部のエムシャー地域はライン・ヘルネ運河の整備後に工業化が進展し急激に都市化した。反面無秩序な開発もなされた。当地方は水運がライン川経由で大西洋へ通じたため世界有数の工業地帯になり、ドイツの工業生産の大部分を担うまでになった。しかしエネルギー源が石油に転換するにつれ、1960年代に入り同地方は石炭、ついで重工業が下火になり不況にみまわれ、失業率は西ドイツ最大となり人口減少が続いた。北部のエムシャー地域では炭坑や製鉄所を中心に都市が形成されており、それら企業の休業によって地域経済が崩壊。住民は心の拠り所さえも失った。更に、放棄された産業施設、工業進展の中で起こった土壌・水質の汚染など「負の遺産」が山積していた。一方で、道路や軌道・運河といったインフラや安価で広大な土地、多数の技術者の存在などに加え、欧州の中心的位置という立地により高いポテンシャルを有していた。

上記のような背景の中で、このエムシャー地域に国際建設展覧会を誘致して経済の活性化、地域の再生を図ったのがIBAエムシャーパークプロジェクトである。対象地域は東西50km、総面積800平方キロメートルにも及ぶ。ノルドライン・ウエストファーレン州が主催し、1989年に外郭団体として有限会社IBAエムシャーパーク社が10年間限定で設立され、プロジェクトの調整・推進の役を担った。資本金と運営資金は州が出資した。事業の遂行の主体は建設会社・デヴェロッパなどの民間会社や市町村であった。

エムシャーパーク社が先ず行なったことは、展覧会の目標即ち地域の将来のあるべき姿・理念を示すガイドラインを作成することであった。以下の7つである。

- 1) エムシャー・ラントシャフトパーク(エムシャー地域の緑地景観づくり)
- 2) エムシャー水系システムの改善(水質改善)
- 3) 体験・学習の場としての運河(住民に親しんでもらう)
- 4) 歴史の証人としての産業文化財(旧工業地帯の歴史的遺産を生かす)
- 5) 緑の中の職場(よい環境の職場にはよい労働者が集まる)
- 6) 住宅建設と地域開発
- 7) 社会・文化活動の場の提供

エムシャーパーク社の仕事は、上記理念と各プロジェクトの整合性審査、認定プロジェクトの宣伝、国やEUの補助金獲得の援助、コンペの主宰等であった。広大な地域の中で上記方針に沿う多数のプロジェクトが遂行され、重工業からデザイン・映画など文化・教育面などに産業構造が転換し、ソフト産業を中心として地域が蘇りつつある。それには、かつてこの地方の産業を支えた多くの施設が産業遺産として活用された。エムシャーパーク社は2000年に幕を下ろしたが、各地で上記理念に沿ったプロジェクトが更に進行中である。2003年に見学したいいくつかの施設を以下に紹介する

## 都市点描



図1：マニファクトゥム(ヴァルトロップ)



図5：ガソメーター



図2：マニファクトゥム内部



図6：エムシャー川とライン・ヘルネ運河

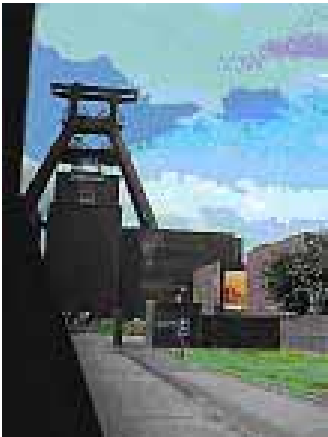


図3：ツォルファアイン・第12縦坑の巻き上げ機



図7：リュンテック (UF0)



図8：アカデミー モン・セニ



図4：ツォルファアイン・デザインミュージアム



図9：研修施設脇に設けられた集合住宅

図1：マニファクトゥム (ヴァルトロップ) かつてのプロイセン国王の艦隊に燃料を納入していた炭坑施設を地元産品の展示販売施設やレストランとして活用

図2：マニファクトゥム内部 地元産品を活用したレストラン

図3：ツォルファアイン (エッセン) かつて驚異的な産炭量を誇った第12縦坑の巻き上げ機は地域のシンボルとして残された。

図4：ツォルファアインの内部に炭坑施設を利用して設けられた州のデザインミュージアム(改修：ノーマン・フォスター)

図5：ガソメーター (オーバーハウゼン) かつて製鋼用に使われたガスタンクを展示場とイベントホール、展望台に活用

図6：再整備されたエムシャー川とライン・ヘルネ運河

図7：リュンテック (リュネン) かつての炭坑施設を環境関係の研修施設として活用。巻き上げ機を近未来的にデザインし、地域のシンボルとした。(ルイジ・コラーニ)

図8：アカデミーモン・セニ (ヘルネ) かつての炭坑施設を除却し、州政府の職員再教育施設を建設した。木材で支持された巨大なガラスの覆いの内部は地中海性気候に保れガラスの屋根と壁に設けられた太陽電池と地中ガスをを用いたソージェネで発電し、施設と地域に供給している。

図9：アカデミーの脇に設けられた職員用の住宅。雇用と居住を供給している。

## 新入会員紹介

---

滋賀県 平居 晋 A.SITE  
兵庫県 末包伸吾 神戸大学工学部建設学科  
京都府 梅林 克 エフオービーアソシエーション  
京都府 矢田朝士 ATELIER-ASH  
京都府 齋藤篤史 東洋設計事務所  
大阪府 中浦弘嗣 中浦建築事務所

## 編集後記

新春を迎え、新たな目標を掲げられましたでしょうか。  
阪神・淡路大震災から11年が過ぎ、記憶が薄れていっているように感じます。これからも、その時の教訓を日常生活の中に生かしていきたいと思います。

JIAでの会話の中で「……建築家五原則……。」というのを聞きますが、年に何度、「建築家職能原則 五項目」を見られますか。

現在は、平成16年(2004年)に改訂し、「建築家憲章」と「倫理規定」とで構成され、「行動規範(ガイドライン)」が盛り込まれています。近年、建築業界がいろいろと騒がしい中で、今一度、読み返していただきたいと思います。

まだまだ、寒い日々がつづくと思います。風邪などひかれないようにご自愛して下さい。

余談ですが、昨年の出生児の名前で「翔」の字が使われた名前が多かったようです。  
(広報委員 小池啓夫)

---

## 広報委員会

委員長 小南一郎(大阪)  
副委員長 小池啓夫(大阪)  
委員 足立成美(京都) 一尾晋示(大阪) 井上 守(大阪) 太田恭司(大阪)  
木戸口浩之(京都) 瀧川嘉彦(和歌山) 佐々木純一(大阪)  
佐藤洋司(大阪) 柴田敬四郎(奈良) 内藤 正(滋賀)  
森崎輝行(兵庫) 横関正人(大阪) 大江一夫(住宅部会長)  
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔  
発行日 2006年1月30日(新春号)  
発行人 出江 寛  
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部  
〒541-0051  
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374  
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>  
メールアドレス [jia@bc.wakwak.com](mailto:jia@bc.wakwak.com)

表紙 「三百万人の現代都市」 ル・コルビュジエ